

## 精神医療に風穴を、思いを書籍に

東京新聞 2024年9月18日

精神医療に風穴をあけようと、1冊の書籍が生まれた。「精神病院・認知症の『闇』に九人のジャーナリストが迫る」(ぶどう社)だ。それぞれがそれぞれの視点で精神医療を語った。ページをめくると、この国の人権意識が見えてくる。



### ◆9人のジャーナリストの視点で

9人は、滝山病院の虐待問題をスクープした2人のNHKディレクターや読売新聞の医療部で15年間活躍した元記者、週刊東洋経済の元編集長など。半世紀近く前の1970年代にアルコール依存症を装って病院に潜入取材し、「ルポ・精神病棟」を上梓(じょうし)したこの分野のパイオニア的存在の大熊一夫さんもいる。編著は元朝日新聞論説委員の大熊由紀子さん。媒体やキャリアは違えど、精神医療を精力的に伝えてきた点で共通している。

### ◆媒体の枠を超え、共に出版した書籍

書籍は2部構成で、第1部は昨秋開かれたシンポジウム「『新たなえにし』を結ぶ会」での登壇者の話がベースになっている。第2部は、40年間精神科病院に入院していた伊藤時男さん(73)と2人のジャーナリストによる鼎談などを掲載している。

記者は第1部に掲載されたシンポジウムに登壇し、ファシリテーターも務めた。精神医療の取材歴は最も浅いが、皆さんの胸を借りるつもりで飛び込んだ。そして、皆さんの真摯(しんし)な言葉に、迷いながらも伝え続けてきた信念を感じ、心強い気持ちにもなった。



### ◆新たな社会へと変わるきっかけになれば

同じ分野を取材するジャーナリストらが、それぞれの枠を超えて共に本を出す機会はそんなに多くない。だが、岩盤のような社会課題を打ち破るためには、時にはタッグを組む局面が必要なのだと思う。

この書籍は精神医療に関する単純な批判本ではない。どうしたら身体拘束がなくなるか、社会のスティグマ=負の烙印(らくいん)=が減るのか。その問いに向き合う人たちが、わかりやすい言葉で新たな視点を投げかけた。精神科病院の関係者や厚生労働省の職員にもぜひ手に取ってもらいたい。新たな社会へと変わるきっかけにと、願ってやまない。(木原育子)

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/354698?rct=tokuhou>